Rotary
２８３０地区

HACHINOHE ROTARY CLUB
Club Weekly Bulletin

No.３１８７
2021.５.19発行

会　　長　道尻　誠助
副 会 長 / クラブ奉仕　小井田和哉
会長エレクト　小井田和哉
職業奉仕　石橋　信雄
社会奉仕　川村　幸雄
国際奉仕　築舘　智大
青少年奉仕　正部家光彦
幹　　事　紺野　　広
会　　計　峯　　正一
会場監督　村上　壽治
直前会長　佐々木泰宏
副 幹 事　深澤　　隆
会計補佐　渡辺　　孝

例会日　毎週水曜日　12：30　例会場　八戸グランドホテル
事務所　八 戸 市 番 町 14　八戸グランドホテル内
電話 (43) ０６０８　FAX (43) ０６６１
e-mail rc8@vc.hi-net.ne.jp
http://hachinohe-rotary.org/
会報・広報委員長　広瀬　知明　同副委員長　福井　哲郎
同　委　員　奈良　全洋

国際ロータリーのテーマ　―2020～21―　八戸ロータリークラブのテーマ

ロータリーは機会の扉を開く　　**来 週 も 会 お う !!**

国際ロータリー会長　ホルガー・クナーク　　八戸ロータリークラブ会長　道　尻　誠　助

５ 月 は　青 少 年 奉 仕 月 間 で す

第３１８７回例会　２０２１.５.１２

会 長 要 件　道尻　誠助 会長

今日は開館前の新美術館を見させてもらうことになりました。八戸市の皆さんには大変お世話になります。また、職業奉仕委員会の石橋委員長には大変ご尽力いただきました。全く作品がないので、自分の心に描いた絵とか彫刻をイメージしてみていただければと思います。皆さん、落書きだけはしないように(笑)。

幹 事 報 告　紺野　広 幹事

○近隣のコロナ感染の状況ですが、市民病院は２名、日赤はゼロ、宿泊療養が９名と非常に落ち着いてまいりました。
○５月15日㈯午前10時から母子生活支援施設「小菊荘」で花壇整備を行います。現在、６名の方に手を挙げていただきました。二手に分かれて、パセリー菜から３名、子どもたちは９名参加します。小菊荘からは上限８名と言われています。まだ空きがありますので、時間に余裕のある方はぜひ参加をお願いします。

委　員　会　報　告

親睦・会場委員会　　**広瀬　知明委員**

○ニコニコボックスの報告
- 奥様誕生祝　今　彰夫さん
- 結婚記念日　澤藤　孝之さん

職　場　訪　問

職業奉仕委員会　　**石橋　信雄委員長**

皆さんは職場訪問例会を毎年楽しみにされていると思いますが、コロナ禍で紆余曲折があり、民間施設でお引き受けいただけるところがなかったのですが、例会場の八戸グランドホテルのすぐ近くで今年11月に八戸市美術館がオープンするということで、市にお願いしたところ、快く引き受けていただきました。おそらく展示のない中で見学できるまたとない機会ですので、ぜひ学んでいただければと思います。

八戸市美術館　　高森大輔副館長

旧美術館は昭和44年に建設された旧税務署を昭和61年に用途変更して開館しました。郷土の作家を中心に約3,0000点の作品を収蔵し、毎年企画展やコレクション展を行い、市民の皆さんの作品展示の場としても使われてきました。入館者数は年平均で35,000人程度で、一番多かったのが平成27年度の48,000人。主な地元の収蔵作家は橋本雪蕉さん、佐々木泰南さん、豊島弘尚さん、特徴的な作品として教育版画があります。昭和30～50年代に市内の中学校で坂本小九郎さんという先生が熱心に取り組んだものです。こちらが「星空をペガサスと牛が飛んでいく」。スタジオジブリの「魔女の宅急便」にも登場しました。美術館の収蔵品というと名画名作をイメージしますが、美術館には地域の美術活動をきちんと伝えていく役割があります。全く無名の中学生が作った作品であっても美術品として保存しています。

新美術館が整備された背景は、旧美術館の老朽化が進み、美術館の機能としてもオフィスビルを改装して展示室を造っているので非常に厳しい。耐震性の面でも不安があり、新美術館を建設する方向に舵が切られました。単に建て替えではなく、街づくりの一環として民間と協調した再開発事業として実施しました。具体的には隣接する青森銀行と土地を交換して整備し、青森銀行は昨年９月にオープン、交番も市役所の広場に移転しました。美術館の本棟は昨年末に竣工し、広場を整備する工事が最後に残っています。平成28年度に基本構想を策定し、設計者の選定でプロポーザルを実施しましたが、全国の138社から提案がありました。２次審査も通常は非公開ですが、はっちで市民に公開して行い、初の取り組みとして注目を集めました。基本設計、実施設計を経て、令和元年度から本棟工事に着手し、昨年末に竣工。事務室も今年の２月から移転しました。グランドオープンは11月ごろを予定しています。

本棟は鉄骨造りで地上３階建て。学びの拠点、ラーニングセンターというコンセプトで整備しました。新美術館の建物には二つの大きな特徴があります。一つはジャイアントルーム、今、皆さんがいらっしゃる場所です。エントランスとしてだけではなく、人々が自由に集い、学び、活動する場所としての役割を担う巨大な空間です。これを取り囲むようにホワイトキューブ、ブラックキューブ、スタジオといった専門的な部屋を配置しました。通常の美術館は展示室が一番大きいのですが、延べ床面積が4800平方㍍ある中で、ジャイアントルームが最大の空間、約800平方㍍あります。イメージパースをご覧ください。この大きな棚は道具を入れられますが、レールで自由に動かすことができます。この棚と高さ10㍍の天井からつるすカーテンで空間を区切って部屋として使います。例えば、学芸員が企画を練っている姿を来館者に見せて活動に引き込むような。棚の表面はホワイトボード仕上げです。大きなテーブル、椅子もあります。館内はフリーWi-Fiなので、ぷらっと来て仕事もできる。市民の作品展の展示場として使ったり、カーテンを屋根のようにした空間をつくることもできます。

ホワイトキューブは新美術館で最も大きな展示室で、さまざまな作品を展示できるよう白い壁にしたのが特徴です。ギャラリーは市民の皆さんが利用するのを想定した展示室。窓があって中から外の雰囲気も感じられるし、外から見ることもできる。回転する大きな壁があって、自由に部屋をレイアウトできます。コレクションラボは、美術館の収蔵作品を展示する、常設展示室に相当する部屋です。ただ単に展示するだけではなく、床がカーペッ

八戸市美術館の外観パース

ト仕上げになっていて、子どもたちが座って模写をしたり、寝っ転がって作品を見たり、大胆な見せ方ができます。ブラックキューブは真っ黒な部屋で映像作品を投影するのに特化した部屋。是川縄文館のように展示ケースを置いて作品を１点だけ見せることもできます。スタジオは作品展示だけではなく、パフォーミングアーツと言われるダンスとか演奏会、講演会を行うことができます。ワークショップルームには水場と収納を備えており、モノを作ることができます。

ここからは新美術館のコンセプトをご紹介します。ビジョンとして、「種をまき、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館～出会いと学びのアートファーム」を掲げています。畑に種をまいて収穫していくイメージで、人々の心に美術の種をまき、花開いたものが結実して作品として見えてくるような、そういう運営を目指します。そのため、作品を展示したり創作したりする美術館の基本的な役割に加え、いろんな人が集まって互いに作品を鑑賞し、創作活動を通して刺激し合いながら育まれていく「アートの学び」、そして観光や福祉、地域コミュニティというさまざまな分野と美術を結び付けて街づくりに生かしてく「アートの街づくり」という三つの役割を融合した新しい美術館にしたいと考えています。美術館は作品と出合ったり、見たり知ったり考える場として機能しますが、美術館の中で全て完結するのではなく、街にどんどんはみ出していく、飛び出していくことも視野に入れています。ここで育まれた人たちが街でさまざまな活動を展開することによって地域をつくっていく。新美術館はアート活動を通して人々の創造性を育み地域や街をつくる力にする、その中心になることをコンセプトに掲げています。

アートの学びを進めるために特徴的な事業を展開します。一つは学校教育と連携したスクールプロジェクト。今までは出張美術館と称して学校に作品を持って行って鑑賞してもらったり、学校から子どもたちを連れてきて鑑賞してもらったりしていましたが、もっと学校の授業に深く関われないか、そのための仕組みを美術館の中に作って学芸員と学校の美術の先生が一緒になって新しい美術教育の在り方を研究する場をラボという形で立ち上げます。そのため、昨年、学校連携ラボプロジェクトチームを設置し、小中高校の美術、図工の先生たちと学芸員が新しい授業を考えています。一つの実験的な取り組みとして、「旅するムサビ」、黒板ジャックをやりました。武蔵野美術大のプロジェクトで、学生を招聘（しょうへい）して黒板にアート作品をチョークで書き、何も知らされていない生徒が翌朝学校に来てびっくりする。学生と生徒が一緒に対話しながらこれを鑑賞する取り組みです。

高等教育機関との連携という点で、大学・高専との連携プロジェクトも考えています。郊外にある３大学・高専と美術館が連携し、それぞれが持っている専門性を掛け合わせてアートの力をさまざまな分野に波及させようという取り組みです。美術館の中に学生や先生が活動できる拠点を設け、中心街に学生を呼び込んで街の活性化に結び付ける。例を挙げると、八戸学院短期大の佐貫巧さんが幼児教育を中心としたアートイズという活動に取り組んでおり、アートビジネスセミナーのような取り組みもしています。

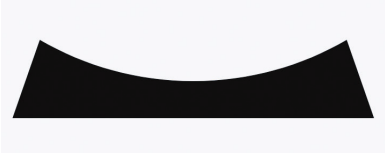
青森県内に目を向けると、県立美術館や十和田市現代美術館、昨年オープンした弘前れんが倉庫美術館、青森市の国際芸術センター青森、それぞれの特徴を生かして首都圏からお客さんを呼び込もうと昨年、５館の連携協議会が立ち上がりました。県立美術館の杉本康雄館長の呼び掛けて発足しました。杉本さんも美術の分野だけでなく地元の経済界とタ

見学に先立ち、高森副会長の説明を聞く会員

イアップして、青森を“アート県”として情報発信したいという思いがあります。

美術館は作品があって美術に関心がある人が行く場所ととらえられがちですが、新美術館は単にアート好きな人だけが来る場にはしたくない。このために、さまざまな仕掛けを用意しています。ジャイアントルームは無料で誰でも入れる空間です。打ち合わせや休憩だけでも使える場所。ぷらっと入っていただいて、作品展示の場所に引き込んでいく仕掛けを用意したい。新美術館はアートを通した学びで地域に対する理解や創造性が高まって、街づくりに向かっていく人を育む場にしたいと思っています。

八戸市美術館の可能性について。有名な建築家の磯崎新さんが歴史的な背景を踏まえると美術館を世代で分類できると話しています。王侯貴族が持っているお宝を公開する役割が美術館のスタートですが、ルーブル美術館のようなコレクションを見せるのが第１世代。第２世代はニューヨーク近代美術館に代表されるように、抽象画などどんな作品にも対応できるよう白壁を持った美術館です。さらに時代が進み、十和田市現代美術館のようにその場所でしか成立しない作品のための美術館が登場しました。八戸市美術館はどういう美術館になるか。館長に就任した日本大学教授の佐藤慎也さんは八戸市美術館は第４世代の美術館になり得ると話しています。第１～３世代の美術館はモノとしての作品を扱っていましたが、美術がモノからコトに変化しつつある現代を踏まえて、新美術館はコトに対応できる美術館になるだろうと話しています。ヒトが含まれる作品を扱い、コトを起こしていくアートを受け止めることができる美術館です。



最後に最近の話題をご紹介します。これが美術館のシンボルマークです＝**写真**＝。これは新美術館の形を俯瞰（ふかん）したものをイメージしていますが、土台のように見えて、その上に大きく丸が表れています。八戸の未来を創るための土台になる美術館というイメージです。佐藤館長は、もともと新美術館の管理運営計画の策定や設計者の選定プロポーザルにも関わり、美術館の整備の経緯を熟知された方です。ご自身も建築家ですが、アートプロジェクトの設計にも携わっていて、美術分野にも幅広く知見を持たれています。今年の八戸三社大祭は山車運行が残念ながら中止となりましたが、オープニングプロジェクトは「ギフト、ギフト―創造の種」と題し、三社大祭を市民最大の創造活動ととらえて、展覧会を開催したい。詳細については決まり次第、発表していきます。

この後、皆さまに館内をご案内しますので、よろしくお願いします。

ジャイアントルームを視察する会員

出　席　報　告

出席委員会

第３１８７回例会（５月１２日）			第３１８５回例会（４月２１日）		
出　席　率		１００％	出　席　率	５９.３％	修　正 出席率　１００％
総会員数	６２名	出席数 ６２名	総会員数	６０名	メークアップした人数　２４名
出席義務会員 ６２名	出席免除会員 ０名	欠席数 ０名	出席義務会員 ５９名	出席免除会員 １名	欠席数　０名

寄　付　報　告

国際奉仕委員会

５月１２日現在	
財団寄付額	￥３９０,３００
目標達成率	３３.６％
寄付者数	２１／６２名
米山寄付額	￥２８０,８００
目標達成率	４５.３％
寄付者数	２０／６２名